

「永松文庫」について

栗崎 了

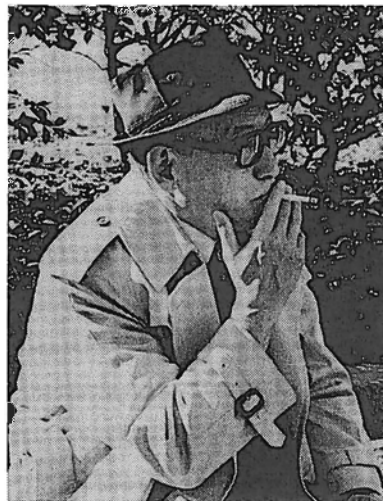
「永松文庫」は、平成3年に亡くなられた永松譲一先生の蔵書の中から選び出して寄贈していただいたもので、主として欧文の図書（ドイツ文学とその周辺のもの）からなる約2000冊のコレクションである。

永松先生は、昭和6年に東京帝国大学を卒業、その後も引き続き大学院で研鑽を積まれ、昭和10年に新潟高等学校の教授に就任、昭和18年に先生の母校でもある第五高等学校の教授として熊本に赴任された。熊本大学発足（昭和24年）後は、法文学部の教授として活躍され、昭和47年に停年により退官された。退官後は、昭和57年まで、埼玉医科大学教授を務められた。

先生は熊本大学では20数年働かれたことになる。法文学部長や評議員等の要職に就かれ、草創期の熊本大学の拡充発展に貢献された。昭和47年には、法文学部に大学院文学研究科と法学研究科が設置されたが、その時はその設置委員会の委員長として活躍された。それを実現に導かれた先生の御功績は特筆に値する。

先生の御専門はドイツ文学である。独和辞典やゲーテの研究で著名な木村謹治先生のことをよく話しておられた。おそらく先生は木村先生の愛弟子の一人であったのではないかと思う。ゲーテについては、特にその青年時代に精しく、先生の主著は『ロココ・ゲーテ覚え書』である。また、第五高等学校に赴任された翌年に、独文学史の名著の一つであるヘルマン・アウグスト・コルフの『ゲーテ時代の精神』の第一部の翻訳を、桜井書店から出版された。このような研究の傍ら、良寛、玉山、豪潮などの書愛され、豪潮については著書がある。また、亡くなる前には、県立美術館協議会員を務めておられた。

「永松文庫」は、大きく四つに分類することが出来る。A)ゲーテに関するもの〔約290点、約700冊〕。B)ドイツ哲学・文学に関するもの〔約900冊〕。C)文学史、文芸学、文化史等〔約170冊〕。D)その他。輪郭をつかんでいただくために点数と冊数も挙げたが、概数である。A)とB)については、もう少し詳しく述べたい。



永松教授：昭和56年11月22日
皇居北の丸公園にて。山岸正弥氏撮影

A)ゲーテに関するもの ゲーテ研究者である先生が60数年間に集められたゲーテ・コレクションである。一応便宜的に次のように分類してみた。

- 1)全集〔11点、330冊〕
- 2)ロココ・ゲーテ（若きゲーテ）〔4点、16冊〕
- 3)書簡〔22点、33冊〕
- 4)談話、対話〔25点、45冊〕
- 5)作品（単行本）〔38点、44冊〕
- 6)レクラム版〔20点、22冊〕
- 7)年表・年譜〔5点、9冊〕
- 8)ゲーテ研究（モノグラフィー）〔121点、130冊〕
- 9)辞書、ハンドブック〔6点、10冊+26分冊〕
- 10)年鑑
- 11)雑誌（記念特輯号）〔4点、6冊〕
- 12)和書〔31点、47冊〕（ここの数字も概数である。）

モノグラフィーを見てみよう。日本ばかりではなく、ドイツ本国でも、ゲーテに関して、このように多くのモノグラフィーを個人で集めた人は、おそらく数えるほどしかないであろう。また、全集を見ると、ワイマル版（Weimarer Ausgabe、復刻版）からまだ刊行中のミュンヘン版（Münchener-Ausgabe）に至るまで、10点ほどの版が揃っている。祝祭記念版（Festausgabe、1926～27）やヴィルヘルム・エルンスト大公版（Grossherzog Wilhelm Ernst Ausgabe、1920～23）も珍しい。40巻からなるコッタ書店の記念版（Jubiläums-Ausgabe、1902～12）は、索引が完備していて便利なので、私もよく利用した。非常に貴重な全集だと思うが、復刻版はない。（文学部の独語独文学研究室所蔵のこの版には欠本がある。惜しいことに1巻欠けている。）

熊本大学文学部の独語独文学研究室所蔵のゲーテに関する文献も、大部分は永松先生が在職中に集められたものであるが、相当な数に達する。ゲーテを本格的に研究するために必要とするものは大抵揃えてあると言ってよいのではないだろうか。予備知識がなければ使いこなせないようなものもある。日本では有数のゲーテ・コレクションの中に入るのではないかと思う。ワイマル版は革装丁の原本である。その他にも、ゲーテの生前に出版され、ゲーテ自身が編集に携わった版が二三ある。このような研究室のコレクションに「永松文庫」

の上述の図書が加わると、熊本大学のゲーテに関する文献はさらに完備する。調べたわけではなく、私の推測にしか過ぎないが、日本一の、あるいは世界的にも注目に値するゲーテ・コレクションになるのではないであろうか。このコレクションが今後もさらに補充完備されることを願っている。

B) ドイツ哲学・文学に関するもの このコレクションは、古い時代の作品も二三あるが、大部分は18世紀から現代までの約80人の作家や哲学者の全集や単行本、約30点の時代別やジャンル別に編まれた叢書・選集、約30人の哲学者や作家に関するモノグラフィーなどから成り立っている。

この中に入っているものの中で、私がそのうちゆっくり手に取って見たいと思っているものに、Walter Harich編のE. T. A. ホフマンの全集がある。

ゲーテ時代（18世紀後半から19世紀前半）の研究をしている方は、この中にさらにいくつも利用したいと思う本を見出されることであろう。

「永松文庫」の中の珍しいものとしては、戦後の詩人ギュンター・アイヒ(1907~1972)の手書きの詩『日本の木版画』(Japanischer Holzschnitt)がある。彼は昭和38年に来日、熊本日独協会の招待を受けて、四国と阿蘇を経由して熊本まで足をのびし、自作の詩をいくつか朗読している。この手書きの詩は、その折に、作者から先生に感謝の印として贈られたものである。

永松先生は、また、外国人による日本・東洋研究の

成果、外国人の日本についての手記、内外の日本文化論や比較文化論などに興味をもっておられた。そして、先生が集めておられた本がかなりあるので、これもこの文庫に入れていただいた。最近では世界の各地から熊本大学に留学し、日本や東洋の研究をしている人がかなりいる。そのような方々のお役に立つかもしれないとも考えた。利用して下さいれば幸いである。

永松先生が亡くなられてから間もなく、御令室のヤス子様から先生の蔵書を熊本大学に寄贈したいとお申し出があった。それから半年ほど経ってから、教養部の深堀建二郎氏の協力を得て、休暇中などに暇を見つけ、図書を選択し、リスト作成に取り掛かった。さらに、それをもとにして、仕事の合間に私がアルファベット順に配列したり、分類したりして、どうにか定年前に目録を仕上げる事ができた。先生が亡くなってから、早いもので、もう3年8ヶ月になる。遅くなったが、先生の愛された蔵書の主要なものが死蔵や散逸を免れ、「永松文庫」として多くの人の利用に供されるようになった。亡くなった先生も喜んでおられるのではないかと思う。

これが実現するまで、前附属図書館長の植村啓治郎教授、田尻英雄前課長、石井保廣課長、草野隆夫専門員、梅尾勝征係長、その他多くの方にお世話になった。心から御礼を申し上げたい。

(くりさき さとる 前文学部教授 独文学)

シリーズ熊本大学附属図書館蔵特殊資料紹介10

重要文化財 阿蘇家文書(34巻36冊)

工藤敬一

今回紹介するのは、天文13年(1544)矢部浜の館に居た大宮司阿蘇惟豊が、従三位に叙せられた際の後奈良天皇女房奉書および一連の関係文書である。惟豊は、兄惟長が守護家菊池氏に迎えられたため、永正4年(1507)大宮司となった。その後菊池家々督を捨て、大宮司復帰を図る惟長に一時矢部を逐われたが、日向の甲斐氏の援けを得て復活し、大永、天文年間の30余年にわたり、大宮司の地位を保った。

天文13年9月16日惟豊は、禁裏修理料を献上した功によって、正四位下から従三位に昇叙された。〔A〕は上階のことを告げる後奈良天皇諭旨、〔B〕は辞令に当

る口宣案である。ともに天皇の秘書局である蔵人所(頭人は広橋国光)から出されたもので宿紙(薄墨紙)が用いられている。後奈良天皇は、勅使として日野中納言(烏丸光康)に〔C〕(表紙)の女房奉書などを持って使者として惟豊のもとに下向し、上階のことを伝達するとともに、自筆の般若心経を阿蘇社の社頭に納めるよう命じた。この時代、天皇の意志はしばしば勾当内侍の女房奉書の形で伝えられた。女房奉書は多くこのような散し書きで書かれた。そして〔B〕に見える上卿(担当公卿)の広橋兼秀が、これに添えて惟豊に遣した書状が〔D〕である。これらの文書は一括